

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520219

研究課題名 (和文) 1970 年代のバーミンガムにおける「文学の社会学」運動

研究課題名 (英文) Reevaluating 'Sociology of Literature' in Birmingham in the 1970's

研究代表者 山田 雄三 (YAMADA YUZU)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：10273715

研究成果の概要 (和文)：イギリスのニューレフトと呼ばれる文化・政治運動が、実は1930年代に始まるモダニズムの理念や発想に基づいているという仮説を、これらの研究を通して提唱することができた。それにより、政治学や社会学で考えられてきたように、ニューレフトは冷戦構造と高学歴社会における一時的な現象であったのではなく、近代の産業構造の変化にともなう文化的な反応であったことが立証できた。とりわけ、ニューレフトが理性中心の西欧思想を批判する中で、感情の基づく新しい形式を文学やアートの制作を通して模索していた様態を明らかにすることができた。

研究成果の概要 (英文)： This study argues that British New Left movements (1957-1983) are based on several assumption that British modernism first brought about in the 1930s: Structure of feeling, alignment and subject positions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：ヨーロッパ語系文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：

ニューレフト、カルチュラル・スタディーズ

1. 研究開始当初の背景

研究ともっとも深い関係にあるカルチュラル・スタディーズ(CS)は、現在ではアジアを含む世界諸地域に浸透しつつある新興の分野である。1990年代にアメリカ合衆国で盛り上がったCSは、1950年代後半にRaymond WilliamsやRichard Hoggartなどの英文学者がウェールズの農村やリーズの

労働者居住地にも独自の文化があることを主張したことに始まる。しかしながらWilliamsやHoggartは、CSの鼻祖として教科書的な扱いはされることはあっても、彼らの仕事の全行程を跡付ける研究や、それらとモダニズムとの関係について包括的に扱った研究は、国内外見回しても少ないのが現状である。その原因は次のように考察できる。

1970年代に起こった「言語学的転回」によって、構造主義記号論とポスト構造主義理論が優勢になり、経験主義的な色彩が強いWilliamsらのモダニズム文化論は急速に「古い」という烙印を押されたからである。しかしながら、Williamsの文化論は依然として有効である。どの時代のどの文化にも「残余的」「支配的」「萌芽的」な要素が混在していて、その複雑でダイナミックな関係の総体が文化を形成し、変化させるととらえるからである。このいわば「残余的」な文化理論を再評価しながら、今日の文化事象に適用することを主な研究の目的としている。

そもそもCSは英文学研究から出発しながらも、今日それは社会学に属する新興の1学問分野になっている。英文学研究はウィリアムズらの仕事を正当に評価してこなかったのだから、当然のなりゆきかもしれない。しかし、前述したように、このカルチュラル・スタディーズという分野は元来、人文科学と社会科学の垣根を越えた学際性を特質とする。英文学の分野で研究を出発した者にとって、1968年以降のバーミンガムにおける「**文学の社会学**」研究グループやウィリアムズやホガートなどの英文学者たちが、お互いの対話を通して、社会的、文化的に広い次元で設定していた問題を再確認し、その研究を受け継ぐことは有意義であり、カルチュラル・スタディーズの別の可能性を見出しうるかもしれない。なぜなら、英文学研究の分野は、ことばや修辞、劇的発話や物語ることが社会的政治的に果たす効果について十分な研究の歴史と蓄積を持つからである。そうなれば、社会学で行なわれているカルチュラル・スタディーズと相互補完的に補い合う、ダイナミックな研究となるはずである。

2. 研究の目的

本研究の目的として次を挙げたい。伝統文化対ポピュラー文化という対立構造が最初に顕著になる1968年頃に、バーミンガムを中心に生まれたカルチュラル・スタディーズという分野が、その対立構造を変革するために文学と社会、および文学とポピュラー文化との関係をどのように再定義しようとしていたのかを追及すること。ひいては1970年代のイギリスにあって、スチュアート・ホールを中心とするバーミンガム大学現代文化研究センターがそれに先行するレイモンド・ウィリアムズらの文化理論をどのように修正したのか、また逆に、ウィリアムズやホガートらの世代の文芸批評家がバーミンガムの新しい動向にどのように反応したのかを調査したい。

当該研究はCSと英文学研究とを接合する試みである。当該研究の目的をさらに具体的に以下に示したい。ここで言うCSとは、英

国バーミンガムの現代文化研究センターが1970年代を通して行なった活動を土台としている。本研究代表者は2001年度以降、バーミンガムの研究センター設立に大きな影響を与えた英文学者の文化理論や文化活動を継続的に調査してきた。しかしながら、これらの研究では、1930年代のいわゆるの後期モダニズムから1970年代のバーミンガムにおけるモダニスト的な文化研究を重点的に調査してきたため、1979年のサッチャー政権発足とそれへの反応については手付かずで終わってしまっている。本研究ではその不備を補うため、1970年代末から1980年代降へと調査の範囲を広げたい。

また、伝統的な人文学研究分野である英文学研究も当該研究と密接に関連している。というのも、第2次世界大戦後に、新批評やロシア・フォルマリズムといったモダニズムの芸術論が英文学研究方法上のバックボーンになってきたからだ。Raymond WilliamsやRichard HoggartそれにStuart Hallなど、一般にCSの創始者と呼ばれる批評家たちは、このモダニズムの芸術論を土台として、より社会に開かれた、モダニズムの新しい展開方法を探求してきたということを、十分な資料に基づいて証明したい。本研究の目的として次を挙げたい。(1)英国においてCSの活動が活発になる60年代から70年代に、20世紀初めに起きたモダニズムはどのように時代区分され、再定義が試みられたかを追及すること。(2)サッチャー政権下の1980年代初めに、「モダニズムの終焉」の論説が論壇で目につくようになる。これを契機に、英国のCSは一方でポスト・モダニズム理論への傾倒と、他方でモダニズムを継承する新動向が顕著となる。このような動向とサッチャー主義との関係を明らかにしたい。

3. 研究の方法

ケンブリッジ英文学科及びバーミンガム現代文化研究センター設立に関わる資料並び設立理念に関する討論などはガリ版刷りの資料や学内用のシラバスが多く、現地に赴いて資料を入手した。しかしながら、そのうち出版されて入手可能な図書や文献に関しては、当該研究計画の設備費にてこれを購入し、研究の資料として利用した。また、当該研究を遂行する上で重要な関係定期刊行物の一部に関しては、近年進められたデータベース化のおかげで、海外の所蔵図書館などに出向かなくても、インターネット上のデータベースやCD-ROMで閲覧することが可能となった。それらのものに関しては、購読ライセンスや使用許可を獲得して調査を行った。

4年間にわたる研究期間を研究目的に準じて、前期(平成22-23年度)と後期(平成24-25

年度)に区分した。前期には上述した(1)の目的、CSやニューレフトが20世紀のモダニズムをどのように時代区分し、再定義を試みたかを、英米の図書館や教育機関に所蔵されている刊行物やシラバスを手掛かりに調査・分析した。後期には、(2)の目的である、サッチャー主義とモダニズム政治学との関係について、これも英米の図書館や教育機関に所蔵されている政治刊行物やジャーナルを手掛かりに調査・分析を行った。

4. 研究成果

補助金助成を受けた期間中には、当該研究に関連する論文を公表した。主なものに「ニューレフトと呼ばれたモダニストたち—1950年代の国際情勢とイギリスの「文化・政治」動向」「システム化されない文化システム—感情を文化する」「1968年」伝説の周縁で—『ニューレフト・レビュー』に見るモダニズムの残照」がある。これら3本の論文は、助成以前から調査を行ってきた研究課題「イギリスのニューレフトの研究」とどれも密接に関わっており、時代順に研究を行ってきた本研究の初期の部分、1950年代から1970年代半ばまでを網羅している。さらに本研究と関連する研究論文を編集して、『英語文学の越境—ポストコロニアル/カルチュラル・スタディーズの視点から』(英宝社, 2010)を世に問うこともできた。

イギリスのニューレフトと呼ばれる文化・政治運動が、実は1930年代に始まるモダニズムの理念や発想に基づいているという仮説を、これらの研究を通して提唱することができた。それにより、政治学や社会学で考えられてきたように、ニューレフトは冷戦構造と高学歴社会における一時的な現象であったのではなく、近代の産業構造の変化にもなう文化的な反応であったことが立証できた。とりわけ、ニューレフトが理性中心の西欧思想を批判する中で、感情の基づく新しい形式を文学やアート制作を通して模索していた様態を明らかにすることができた。

また、戦後のモダニズム政治学を象徴する未邦訳の文章を、教科書『原書で読むカルチュラル・スタディーズ』(英宝社)で紹介することもできた。この著書の中心部は、レイモンド・ウィリアムズの批評と創作の紹介および彼の「感情構造」論の解説にあてられているが、その前段階では、ウィリアムズの登場を準備した活動として、F・R・リーヴィスを中心とする『スクリュエティニ』派、E・P・トムソン、リチャード・ホガートなどの文化実践の再評価が行われている。そして近年では、スチュアート・ホールの理論を中心に、ウィリアムズ以後のカルチュラル・スタディ

ーズ(CS)の展開を検討し、さらに、知識人の代弁=表象というテーマから研究者の主体の問題へと迫っている。1990年代以降、CSはその基本概念である「分節=接合(articulation)」を駆使しながら、コミュニティや知的関心などさまざまなレベルにおける「分節」の作業を進めてきたが、より本来的な「接合」の仕事が不十分であったと指摘し、「接合」の契機として「感情構造」概念の再評価を提案している。

この著書の出版により、この分野に関心を持つ学生たちは、翻訳や解説書ではなく第1資料を使って、カルチュラル・スタディーズの諸概念に接することができるようになったと信じる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①山田雄三、書評論文、中井亜佐子著『他者の自伝—ポストコロニアル文学を読む—』(研究社, 2007年)、英文学研究、査読有、86巻、2009、pp.31-35

②山田雄三、「1968年」伝説の周縁で—『ニューレフト・レビュー』に見るモダニズムの残照、ポストコロニアル・フォーメーションズIII、言語文化共同研究プロジェクト2007、大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、2008、pp.11-20

③山田雄三、ニューレフトと呼ばれたモダニストたち—1950年代の国際情勢とイギリスの「文化・政治」動向、ポストコロニアル・フォーメーションズII、言語文化共同研究プロジェクト2006、大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、2007、pp.41-50

〔学会発表〕(計1件)

①山田雄三(コメンテーターとして参加)、シンポジウム・大田信良司会「国際政治の中の20世紀イギリス」、第79回日本英文学会、慶應義塾大学、2007年5月19日

〔図書〕(計4件)

①山田雄三、他(編著)、英宝社、英語文学の越境—ポストコロニアル/カルチュラル・スタディーズの視点から、2010、pp.5-23, 197-200

②山田雄三(共訳)、法蔵館、評伝J・G・フレイザー—その生涯と業績、2009、序章、第1,5,6,7章担当

③山田雄三(共著)、大阪大学出版会、大阪大学新世紀レクチャー・言語文化への招待、2008、pp.58-73

④山田雄三、他(共編)、英宝社、How to Read Cultures 『原書で読むカルチュラル・スタ

デイズ』、2008、pp.i-vi, 1-316

〔その他〕

ホームページ等

<http://www014.upp.so-net.ne.jp/raywillyz/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

山田 雄三 (YAMADA YUZO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授

研究者番号：10273715